定住者のいない満州／「逞しき」朝鮮人

――中野重治「モスクワ指して」の植民地表象をめぐって――

徐　東周

一　はじめに：帝国主義と文学の想像力

「モスクワ指して」（『無産者新聞』一九二八年一〇月五日～一二月一日、六回にわたって連載）は、植民地朝鮮の民族解放（独立）を反植民地運動の国際主義の下で実現するため「モスクワに指して」行く二人の朝鮮人、すなわち「五十一歳の李と一九歳の張」が満州（現、中国の東北部）での苦難―怪我や馬賊からの襲撃―に耐えながらモスクワ行を続けていく姿を描いたものである。昭和天皇の即位式を前にして列島から追放される朝鮮人との別れを通して異民族差別・排除の権力として現われた天皇への痛烈な糾弾を行った詩「雨の降る品川駅」（『改造』一九二九年二月号）が頻繁に取り上げられたのに対して、同じく植民地朝鮮を問題にしているにもかかわらず「モスクワ指して」はほとんど注目されることがなかった。そこには、たとえば「雨の降る品川駅」に見られる天皇への怒りは「抒情詩人としての中野重治」を通して芸術性を獲得したが、「モスクワ指して」は「プロレタリア国際主義に忠実」した作品にすぎないといった評価[1]からうかがえるように、芸術性（文学性）の欠如―当然ながら、その裏側には過剰な政治性という見方があるといえよう―という問題が関わっている。

一方、作者中野が発している「植民地朝鮮の独立（解放）」という政治的発言に関しては、当時としては希に植民地の問題を被植民者の立場（視点）から捉えようとした姿勢が注目される。その一方で、「朝鮮民族を扱いながら少しも民族性を感じさせない表現。…（中略）…中野重治は朝鮮について無知であったし、実は民族解放とは言いながらも、ソビエト中心の労働者革命の一環としてしか捉えなかった」と指摘し、民族解放の問題を「プロレタリア国際主義」の観点から捉えることの政治的正当性を厳しく追及する見解も見られる。[2]

このように「モスクワ指して」は「芸術性の欠陥」という理由で研究対象として周辺化されるか、それとも「政治性の限界」という批判にさらされる中、まっとうに論じられることがなかった。それに、中野自らが「習作の集まり」と位置づけた最初の小説集『鉄の話』（一九三一年、戦旗社発刊）にも収まることがなかった過去を考えると、「モスクワ指して」は実にそ

の成立からずっと中野文学において周辺化されてきたといえる。もちろん、本稿のねらいは「モスクワ指して」を改めて芸術的に救済することでもなければ、政治性の限界に対して弁護することでもない。では、作者自らによって「習作の習作」からも排除されたこのテクストをなぜここで取り上げる必要があるのか。この問いに対する本稿の答えは次のようである。「モスクワ指して」は反帝国主義（反植民地主義）をその主題としている。しかし、結論から言うと、このテクストはそのフィクションの世界の中で植民地（人）を描写あるいは形象化する際、不可避的に帝国主義の時代が生み出した植民地をめぐる想像力に依存している。言い換えると、「モスクワ指して」は反帝国主義の文学と帝国主義の文化との複雑で錯綜する関係を示す材料（テクスト）として見なすことができるのである。したがって本稿での作業は帝国主義と文化の関係を文学の想像力に焦点を当てて検証するものにほかならない。この課題をここでは次のような三つの疑問を通して考察してみたい。

第一に、「モスクワ指して」のように朝鮮民族の独立を主題とした文学側の試みは、当時としては珍しいことであった。しかし後述するが、テクストの中で展開される独立論は朝鮮国内の言説とは隔たったもので、それはむしろ内地の社会主義者の朝鮮独立言説を反復したものにすぎなかった。さらに興味深いのは、このような社会主義者の言説は必ずしも当時の帝国日本の植民イデオロギーとしての同化主義の言説と拮抗関係ではなかったということである。「モスクワ指して」を同時代の朝鮮の独立をめぐる言説空間において見たとき、それはいかなるテクストとして立ち上がってくるのか。

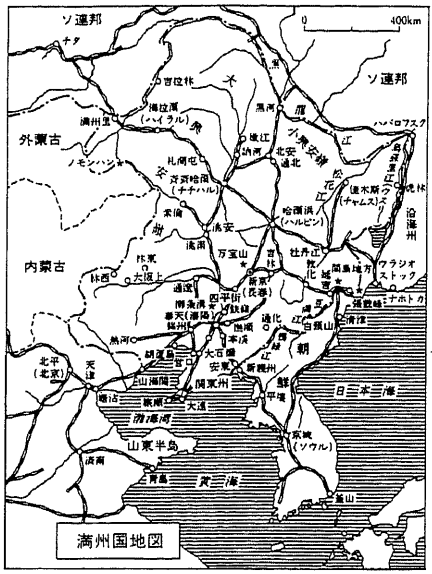
第二に、中野重治は朝鮮に長い間深い関心を持っていたとよくいわれるが、少なくともプロレタリア文学時代を通して朝鮮問題を正面から扱った作品としては「モスクワ指して」と「雨の降る品川駅」の二編に集約される。その中で「モスクワ指して」の特徴として挙げられるのは、満州と朝鮮を同時に視野にいれていることである。しかし、中野自身はそれまで一度も満州ばかりか、朝鮮にも行ったことがなかった。経験を伴なっていないという意味で、「モスクワ指して」の朝鮮と満州は「想像の産物」ともいえる。では中野は列島の外部をいかなる枠組みで想像し捉えたのか、そしてそこに働く中野の列島の外部に対する地政学的認識はどのようなものであったのか。

第三に、徒歩で満州を横断する朝鮮人という設定が想起させるのは、彼等の強靱な身体性といえる。それはひとまずプロレタリア文学の労働者の身体表象を踏襲したように見える。しかし、その身体性が他ならぬ移動という行為と結びついている点にプロレタリア文学の身体表象と異なる作者中野の選択があったのではないか。朝鮮に渡ったことがない中野は、どこからこのような朝鮮人像を採用したのか、そしてこのような表象のされ方に含まれている政治的意味とは何か。

二　階級主義の朝鮮独立論と一九二〇年代「帝国の思想」

「モスクワ指して」は「一九一九年」「東支鉄道に沿うて、興安嶺を超え、コロンバイルに入り、ハイラル、マンチュリア、

チタを過ぎて遥かにモスクワに続いていた」道を「十九になつたばかりの若い張と額に皺の寄つた五十一の李とが肩を組み合わすようにしながら興安嶺の方へ急いでいた」という記述から始まる。彼らが徒歩で急ぐこの道は、「汽車の出来た今頃」は「選ぶものは誰もない」道であり、ただ「ひと儲けを目論む密輸入業者」と彼らの「合財袋をねらう」「馬賊」しか通らない「危つかし」い道である。それから【図一】に見るように、間島を出発してチタに向かう二人の移動は、実際においてはちょうど満州を東南から西北へと横断するかたちをとっていることがわかる。それでは、なぜ朝鮮人である二人は異国の満州を横断しなければならなかったのか、それにまた、横断する二人の目的地はなぜモスクワでなければならないのか。「モスクワ指して」にはその理由について次のように記してある。「一九一〇年この方というもの「我々の朝鮮の兄弟たち」は身の毛もよだつ総督府政治のまん中に叩き込まれた」。そして、その中から「植民地朝鮮における民族解放運動の火の手が…半島全国にわたつて龍巻のように捲きあがつた」。だが「だがもちろんこの仕事（朝鮮民族解放の仕事）は国際的なはかりに掛けられなくてはならない」のだ。それで、



【図一】満州国地図

ある年人々は特定の男を選び、この選ばれた仲間は仕事の総計を携えてモスクワに行き、そこでそれが植民地運動の世界的全図のなかで計量され、新しい方針決定され、それが持ち帰られ、その後の苦しい一年のあいだにそれが生かされた。そしてその一年がいま経過しようとしていた。一年間の仕事の結果がモスクワに持つて行かれなくてはならない。ふたたび仲間が選び出されなくてはならない。…（中略）…

それを持つて行く人は…（中略）…頭のぎりぎりから足の爪さきまで階級的でなくてはならない。

そして李と張とが選ばれた。

のであった。李と張をモスクワに向かわせたのは、「朝鮮民族解放」の「仕事」は「国際的なはかりにかけられなくてはならない」、「植民地運動の世界的全図のなかで計量され」なければならないという政治的方針である。反植民地運動の国際的に連帯を支えたのは、言うまでもなく民族を超えた〈階級〉とい

う概念であったわけだが、そのためモスクワに向かう人には「頭のぎりぎりから足の爪さきまで階級的でなくてはならない」という条件が付くのである。

この記述だけを取り上げて中野の朝鮮認識のすべてを論じるのは、言い過ぎかもしれないが、「モスクワ指して」において中野が打ち出しているのは植民地朝鮮の独立を階級主義に従属させる認識であるといえよう。そして、こうした認識が「雨の降る品川駅」においては「朝鮮のプロレタリア」を「日本プロレタリアートの後だて前だて」という表現として現れたことは周知のことである。しかし、当時としては珍しく朝鮮問題に対するこのような積極的な関心にもかかわらず、朝鮮現地の事情はやや異なっていた。たとえば、一九一九年の三・一独立運動は総督府の同化主義政策に対する民族主義的な性格の抵抗運動であったし、また一九二七年には社会主義と民族主義の統合組織として「新幹会」が発足した。このことは朝鮮において民族主義に基づいた独立運動が決して無視できない影響力を持っていたことを示しているといえる。

ここで確認しておきたいのは、この時期中野の展開している朝鮮独立論は、むしろ一九二〇年代内地の社会主義者の言説を反復したものであるということだ。その端的な例を日本共産党の機関誌『赤旗』の一九二三年四月号に載せられた「無産階級から見た朝鮮解放問題に関する29人からのアンケート」から見ることができる。たとえば、当時階級主義の立場から部落民解放を主張した高橋貞樹は朝鮮問題に対しても「朝鮮の独立運動も、今は明確に無産階級自身のものであ」るという返答を送り、他の政治運動に対する階級運動の優位性を唱えた。『近代日本の社会主義と朝鮮』で石坂浩一が指摘したように、当時ほとんどの内地の社会主義者たちは民族運動ないし独立運動を無産階級運動と対立するものとして捉え、前者を否定的に見る認識を示した。

そしてこのような動向を反映するかのように、在日朝鮮人労働運動の場合も、一九二〇年代後半に入ると、民族主義を斥け、その活動の方針として階級主義を前面に押し出すようになる。一九二七年結成された「在日本朝鮮労働総同盟」は綱領に「本同盟は朝鮮無産者階級の指導的精神のもとで政治的闘争を展開し民族的解放を期す」と明記し、たとえ民族より階級を優先してはいるものの、依然として「民族的解放」を自らの政治的課題として取り上げていたが、一九二九年一二月、日本人労働組合と朝鮮人労働組合との統合によって誕生した「日本労働組合全国協会」（以下、全協）に至っては、「在日本朝鮮人労働者階級の利益」は「民族的闘争を放棄し」、「徹底的に左翼労働組合」の見地から目指すことを公言し、「民族的利益の階級的利益への従属」を明らかにした。[3]

内地の社会主義運動におけるこのような〈民族から階級へ〉の転換をもたらしたのは、一九二八年二月に行なわれたコミンテルン第六回大会をきっかけとするソビエトの反植民地運動に関する政策の変化であった。コミンテルンの大会でいわゆる「一国一党主義の原則」が採択されると、その後開かれたプロフィテルン第四回大会では、その方針に従って「日本労働組合評議会と在日本朝鮮労働総同盟の合同に関する勧告」が決めら

れた。それから、この「勧告」を受け入れた日本共産党の指導の下で、日本人労働組合と在日朝鮮人労働組合との統合組織として「全協」が生まれるようになったのである。

コミンテルン第六回大会を発端とするこうした内地労働運動の再編の動きは、一九二八年一〇月の時点で、なぜ国際主義・階級主義に民族解放という課題を従属させる朝鮮人を描いた小説が共産党の合法的機関誌とされた『無産者新聞』に登場したのかという疑問について、ある回答を与えてくれる。おそらく「モスクワ指して」の背後には、「全協」の結成を控えて、日本人労働者の階級的連帯意識を高めようとする政治的要請が働いていたと考えられる。この意味で「頭のぎりぎりから足の爪さきまで階級的でなくてはならない」朝鮮人、すなわち徹底的に階級意識を内面化した朝鮮人の姿は、中野が日本人労働者に示そうとした理想的な労働者像かもしれない。

ところがこのように「モスクワ指して」において中野が展開した朝鮮独立論は、実際の植民地朝鮮で朝鮮人によって打ち出された独立論とは隔たっていた。それはこれまで見てきたように、むしろ一九二〇年代内地の社会主義者たちが共有されていた認識の「反復」あるいは「引用」として見なされる。このことは朝鮮内の事情に関する中野の無知をあらわしていると思われるが、階級主義に基づいた朝鮮独立論の孕む問題性はそこにとどまらない。民族を超える階級主義は日本（人）と朝鮮（人）の関係について、同時代的に展開された同化主義の言説と両民族間の文化的・人種的差異を認めない論理構造を共有したことにより注目する必要がある。

日本植民地政策の特徴の一つは、被支配者を支配者である日本人と同一的なものとして見ることである。朝鮮総督府は、朝鮮人と日本人との区別を制度的に温存しながらも、表面では〈血の同一性〉による朝鮮人の日本人化を標榜した。たとえば、総督府は吉野作造の同化政策批判に対して、「神功皇后、桓武天皇さへも朝鮮王族の血統を引いて居る事を日本側の史籍に明記して居る」ほどに「日鮮人」は「同族」であるから、同化は可能だと反論していたことがあるし、そのような論理がより強化されたかたちで現れたのが、三・一独立運動以後、斉藤実総督によって提唱された〈文化政治〉であった。

それ以後、同化政策が推し進められるのと並行するかたちで、一九二〇年代を通してとりわけ人類学、言語学などを中心として日本と朝鮮との類似性（同一性）を唱える言説―いわゆる帝国の思想―が広く生産・流布された。たとえば、日朝同祖論で有名な鳥居龍蔵は、三・一独立運動が民族自決主義に触発されたことに対して、「ある人は「民族自決」上、朝鮮人は内地人より分離して独立せねばならぬと呼びますが、これもまた大いに誤つているところであります。なんとなれば、日鮮人は民族として同一であります。この互いに同一の民族が、分離して別に独立するという理由がどこにありますか」（「日鮮人は「同源」なり」『同源』一九二〇年八月号）といい、分離独立はむしろ民族自決主義に反することであるという論理を展開したことはよく知られている。[4]

また注目される主張としては、いわゆる天皇主義者の中にも見られる。天皇主義歴史学者として知られた喜田貞吉は「我が

日本民族は、もと〳〵種々の変つた種族から成り立つた複合民族であ」り、また日本と朝鮮はかつて同じ民族が住む同一領域だつたのであり、その後も渡来人の記録は多く、新撰姓氏録では約三分の一が渡来人系であると主張し、日本民族の成立において「単一民族論」を否定した。[13]

これらの論者達は、当時の日本を純粋な単一民族国家ではなく、複数の民族で構成された〈帝国〉であるという認識の上、新しく帝国に包摂された異民族をいかに帝国に統合させることができるかを考えた点において共通する。ただ、彼らはその統合の根拠として日本と朝鮮との言語的・人種的な類似性を取り上げた点において、彼らは純粋な帝国の思想家というより、帝国日本を拡大した国民国家として思考した人たちだったといえる。というのも、言語と人種の類似性は近代的国民の創出を可能にした重要な媒介であったからである。

以上のように、帝国の思想と当時内地の社会主義者たちの階級主義的な朝鮮独立論は、現実的にあからさまに存在した人種・習慣・言語などにおいての朝鮮人と日本人との差異を〈否定〉・〈無化〉するという点において、共鳴したことがわかる。朝鮮問題に関して「モスクワ指して」の問題性は、先行論が指摘したような「朝鮮民族を感じさせる表現」の不在の結果、〈他者としての朝鮮〉に対する〈無知〉をあらわしたということより、そのような無知をもたらした階級主義的発想が、その政治的立場の差異を超えて、日本の帝国主義支配を正当化した帝国の思想と朝鮮の他者性を無化・否定する認識を共有していたことから求められるべきであろう。そして、そこに被植民者としての朝鮮の人々が抱いていた〈差異〉への意識が考慮される余地はなかった。それが結局、朝鮮人労働組合と日本人労働組合の統合によって結成された「全協」においては、朝鮮人組合員数の激減という現象としてあらわれたのである。[14]

三　語られた満州と隠蔽された満州

先にも触れたように、「モスクワ指して」における朝鮮に関する記述は日本による暴力的な支配が行なわれる空間認識によるものとして一貫している。それは総督府政治下に置かれた朝鮮民族の状況を「恐ろしいこのルツボの底で彼等は肉と骨と血とをドロドロ混ぜに搗き砕かれた」と記されたところに端的に見てとれる。だからこそ、植民地朝鮮の独立を目指す主人公たちは、朝鮮を離れて「間島」を中心に活動しなければならなかった。このような設定が暗示することは、朝鮮内部のいかなる反発も許さない総督府政治の徹底した支配の現実であろう。しかし、朝鮮がこのように日本の政治的・軍事的の植民地として、その表象が単一化されているのに対して、テクストの中の満州は明らかに多面的に表象されていることである。

まず満州は列島とは違う〈異国〉として表象されている。二人の主人公が移動する満州の道はそれは「密輸入業者」と彼らの「重みのある合財袋をねらうあの風のように去来する馬賊の群」のみが利用する道である。よく知られているように、日本の満州への侵略が始まった時期から、馬賊は満州の地域性をあらわす存在として認知されてきた。たとえば、当時の満州案内

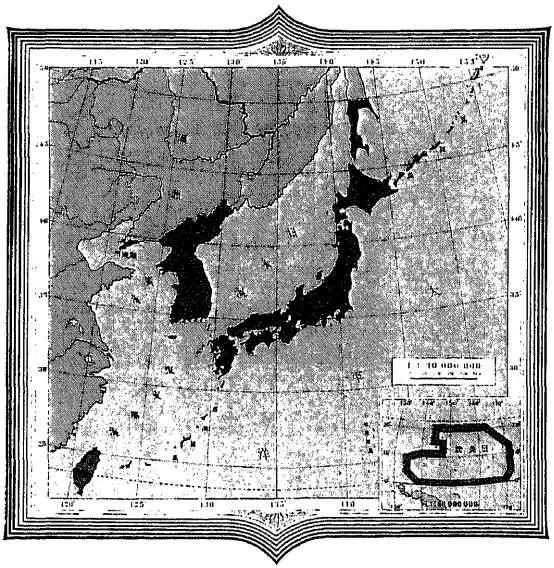
記は「馬賊」を「兎も角支那特有の厄介な代物で、我国では個人又は多少の結合あるに過ぎぬが、彼らは其の広大な天地を利用して。堂々と軍隊的大集団を組織し、出没自在、白日公然と押し歩く」[7]と記しているが、ここから馬賊が満州の地域性をあらわす記号としての機能したことが確認できる。

朝鮮と満州を同時に視野に入れつつ、満州だけに地域性をあたえるまなざしは、別の言い方をするならば、満州と朝鮮を語る側において満州だけが外部として認知する地理的感覚に連動する。つまり、このような満州と朝鮮をめぐる地域表象の差異は満州と朝鮮を〈外／内〉として分割する境界意識の表出といえる。ところが、興味深いのは、このような境界意識が同時代の地図や旅行案内記、そして植民地文学にも確認できるということである。たとえば、帝国の版図をあらわす地図【図二】に見るように、朝鮮と列島は同じ色で塗られているに対して、満州は別の色で区別されている。このような地図の列島外部への眼差しは言うまでもなく朝鮮と満州の間に境界を想像するものである。

さらにこのような境界意識は内地延長主義という立場から書かれた朝鮮の旅行案内記からも確認することができる。

> 釜山から鉄道を汽車で北へ北へ進み、最早や朝鮮と支那との国境に迫る新義州を通り、有名な開閉式鉄橋に依つて鴨緑江を渡り、安東県に這入る時の感じは、誰でも顔も興味すくなからぬものがあらうと思ふ。第一は其の心持である。内地から朝鮮へ入つても、元来が我が勢力範囲内の地へ来た迄で、内地と何の変はりもなく、謂はば内地の延長に他ならない。景色の規模といひ、農村乃至家屋の情態といひ、大体総て日本式である。然るに鴨緑江を超えて安東県に、西へ北へ進むに従つて、荒漠たる平野の大光景を望むに当つては、打つて変つた大陸気分となつて仕舞ふ。[8]

この著者において朝鮮は内地の延長であるが、満州はあきらかに内地とは異なる風貌をもった地域として捉えられている。



【図二】帝国日本の版図
（『日本地理体系』改造社、一九二九より）

言い換えると、朝鮮は内地の一部として、満州は外部としてみなされているのである。また、ここでも満州の自然の広大さという特徴が「大陸」という言葉で記述されているところが目をひくが、まさにその「大陸的」な満州表象が満州を「島」としての日本とは異なる空間として、当時の人々のもっていた外部のイメージに介入したことを想像することはけっして難しくない。そして、このように朝鮮と満州を内と外として区別する認識は、ここで取り上げた幾つかの例に限られた現象ではなかったことも加えておきたい。[9]

次に取り上げたいのは、統治権力が不在であるかのような満州の姿である。それは満州という地域とはもともと関係がない外部者の存在によって浮き彫りされる。たとえば、「モスクワ指して」の満州には日本軍だけではなく、「白の反革命党」、すなわち白系ロシア人も登場する。そこに日本軍の監視を避けながら満州を横断する二人の朝鮮人を加えるなら、満州はまさに異なるナショナリティを持った人々が共存する空間として浮上する。ところが問題はこのような記述は満州には土着的な統治権力が不在しているというイメージに繋がりかねない点にある。

しかし、中野は満州を単に馬賊が走り回る、異国のイメージだけで捉えてはいない。中野は二人の主人公の徒歩移動をもたらした、満州における日本の鉄道支配の現実も書き込んでいる。ここで中野は明らかに満州を植民地として表象しているのである。植民地としての満州を考える際に、鉄道はそれを象徴するものとして取り上げることができるが、それはただ日本によって管理・支配されたということからではなく、むしろ植民者の日本側と被植民者としての原住民の間の〈戦いの現場〉という側面にもっと注目する必要がある。

台湾縦貫鉄道や南満州鉄道については、「敵」はまさには破壊者として、妨害者であり、邪魔者として鉄道建設者、あるいは鉄道の保護者たちの前に立ちふさがった。…張作霖の乗った列車爆破は日本軍自体の陰謀だったが、それが「満鉄」や「関東軍」に敵対するものの仕業であると日本側がデマ宣伝する程度にはリアリティーがあったのであり、列車の運行妨害、破壊行為、襲撃などは、これらの植民地鉄道が決して被植民地の人々に快く受け入れれていたのではなかったことを明白にしている。[10]

当時、満州では鉄道をめぐる日本の「独立守備隊」と「路線のボルトや枕木などが抜き取」ったり、列車が「減速したときをねらって貨車に飛び乗り、積み荷を盗む」事件が頻繁に行なわれた。[11] つまり満州の鉄道は満州の人々には「植民地鉄道」として見なされ、「決して被植民地の人々に快く受け入れられていたのではなかった」のである。満州の鉄道に関わる植民地性の本質をなしていたのは、鉄道の運行を妨害する原住民の行為やその背後に潜んでいる不満の心情であったのである。

しかし、満州の鉄道を支配・管理する日本軍を描きながらも、中野はただ一人の反抗する満州の人も登場させていない。テクストには、支配する日本軍はあっても、抵抗する被植民者の姿はみえないのである。これが問題になるのは、このテクス

トの主題、つまり「植民地運動における国際的連帯」という観点からみると、総督府に押しつぶされている朝鮮人と同じく、独立守備隊の暴行にさらされている満州の人々＝定住者もその連帯の対象になるべきであるのにもかかわらず、このテクストには連帯すべきもうひとつの他者が排除されていることである。

では、この「モスクワ指して」というテクストは植民地的他者に関する、次のような奇妙な二重の排除の論理の上、成り立っていると言わざるをえない。つまり、朝鮮は他者としての資格から排除されているといえるなら、満州の人々は連帯の対象から排除されていると。したがって、このテクストの植民地表象においての問題は、民族性を感じさせない朝鮮描写ではなく、このような二重の排除の論理にこそ求めるべきであろう。

四　「逞しき」朝鮮人と在日朝鮮人労働者の表象

先に述べたように、モスクワに向かう李と張という二人の朝鮮人は何よりも階級主義を内面化した存在として描かれている。そのためというべきか、二人の間に展開される言い争いもモスクワ行という任務をめぐるものである。けがをした自分を残して一人でも道を急ぐことを促す李に対して、張は約束された時間に間に合うことが出来ないことがあっても、二人はともに行動しなければならないと言い返す。任された任務の達成を優先する李に対して、張は二人を「組み合わせた」仲間たちの「意志」をぶつけているのである。このように二人の人物造型においてモスクワ行という政治的行為だけが過剰に露出しているのである。

このような人物造型が登場人物の性格を単純化することはいうまでもないが、テクストの朝鮮人表象という問題と絡めて考える場合、問題となるのは、二人の行動と思考を決定する要因として〈朝鮮人〉というナショナル・アイデンティティはいかなる役割も果たしていないということである。テクストの中で二人が朝鮮人であることを示してくれるのは、「李」と「張」という名前しかないと言っても過言ではない。この意味で先行論が指摘したように、中野は日本（人）の他者としての朝鮮（人）に「無知」だったといえる。

しかし、他者性の除去された政治的人間としての造型とは別に、満州を徒歩で横断するという設定は階級主義のような発想に還元できない、朝鮮人をその身体性から捉える発想の介入が認められる。間島からチタまでを歩いて移動する朝鮮人が喚起させるのは、強靭な肉体（身体）能力である。ところが、ただ強靭な身体性に限っていうと、それはすでにプロレタリア文学の労働者表象にもよく見られるものである。にもかかわらず、このテクストの朝鮮人表象に注目されるのは、それが〈移動〉という行為と結びついている点にある。そして、〈移動〉という行為と身体性を結びつけるまなざしは一九二〇年代の朝鮮人労働者の表象に確認できる。それはテクストの朝鮮人表象が一九二〇年代在日朝鮮人労働者、とりわけ土木工事に従事した労働者をめぐって生産・流通された一連の表象が関わってきた可能性を示唆する。

先にテクストの成立の背景には朝鮮人労働組合と日本人労働組合との統合という内地労働運動の再編の動きがあったことについて言及したが、統合組織としての「全協」に所属した在日労働者の半分以上は土木労働者であった。したがって、このテクストの読者として想定される、日本人労働者たちが頻りに目にした朝鮮人労働者とはおそらく土木労働に従事する人達であっただろう。

では、朝鮮人土木労働者は日本人の目にどのように映されていたのか。一九二〇年代半ば以後、社会調査の流行にともなって、在日朝鮮人に対する実態調査も頻繁に行なわれた。その中では朝鮮人土木労働者に対して次のように日本人を上回る身体能力に関する記述が反復的に表われている。一九二九年（昭和四年）東京府社会課によって発刊された『在京朝鮮人労働者現状』の中には、次のような記述が見られる。

彼らの労働状態は現場に於いては其の逞しき体力を以て急がず迫らず悠々として重量物の運搬に、地堀りに、トロ押しにあるいはコンクリート作業に従事…

肩荷役ニ依ル貨物ノ運搬ニハ鮮人ノ方優レリ、従ッテ最高収入額モ多シ（N倉庫神戸支店）

総ジテ重キモノヲ脊又ハ肩ノ力ニ依リテ運搬スル等ノ仕事ハ、彼等ノ最モ得意トスル所ナリ（Q土木株式会社出張所）

内地人ト大差ナケレトモ、肩荷役ニヨル貨物ノ運搬ニ就テハ鮮人ノ方遥ニ耐久力強シ（S倉庫神戸支店）

在日朝鮮人労働者の主流を成していた点以外、以上の引用の記述からすると、読者としての日本人労働者が満州を徒歩で移動する李と張の姿から朝鮮人土木労働者を連想する可能性は高い。まず、「逞しき体力」の持主という点において二人の主人公と朝鮮人労働者は重なる。そして、その連想をうながすもう一つの要素は、両者とも「運搬する＝運ぶ」行為の遂行者として見なされていることである。先の引用からわかるように、朝鮮人労働者の主な作業は土木現場で重いものを「運ぶ」ことであった。同様、満州を移動する二人の朝鮮人に託されたのは、「（朝鮮での）一年間の仕事の結果を…日本と張作霖と白の反革命党との共同の網の目をくぐり抜けて首尾よくモスクワに届ける」こと、つまり朝鮮での活動の結果をモスクワまで〈運ぶ＝運搬する〉ことである。

このような連想関係は定かではないものの、中野重治が主人公の造型において当時の朝鮮人土木労働者像を参考にした可能性をうかがわせる。ただ本稿にとって問題は、このような連想関係そのものより、「逞しき体力」の持主としての朝鮮人表象にはある種の〈人種的偏見〉が入り込んでいるということである。一九二五年に東京地方職業紹介事務局がまとめた『土工紡績工鉱夫としての鮮人労働者』では「現今内地渡来鮮人労働者の大部分は其の筋力の勝れたる点、機械作業に不適なる点、団結的労働を喜ぶ点等よりして最も土木工事に」適しており、「終日筋力を駆使せしも殆ど倦むことを知らず」、性格は「比較的温順」との記述があるが、ここにはいっそう露骨な仕方でそう

した「人種的偏見」が表明されている。一方では、朝鮮人労働者のなかに「疲れることを知らぬたくましき筋力」と「温順さ」を見出し、他方では産業化の産物たる機械的な労働から彼らの資質を遠ざけておく。この構図からは、「文明」の保持者である帝国がいまだ「野蛮」な植民地にまなざしを向けていくというコロニアルな視線の表出が見られることは明らかである。[12]

ここで指摘して置かなければならないことは、このようなコロニアル的まなざしが生み出した朝鮮人表象は、朝鮮人労働者の現実に対するある〈転倒〉を含んでいることである。一九二五年に東京地方職業紹介事務局がまとめた『土工紡績工鉱夫としての鮮人労働者』には、なぜたくさんの朝鮮人たちが土木労働に従事するようになったのかについて、「筋肉力の強く事以外の特徴なきを以て自然産業関係の直接生産に適せず極めて簡易なる工場雑役…に於てやや多数の就職者ある外大部分は簡単なる筋肉動労方面に駆逐さるる結果となっ」たと記されている。すなわち朝鮮人労働者が主に土木労働者となったのは、「筋肉以外特徴がない」からであるという。しかし、現実はその逆であった。朝鮮人の土木労働者化をもたらしたのは、植民地出身の人々に対する差別意識に基づいた内地の差別的な労働市場構造である。むしろ、朝鮮人の「逞しき体力」は土木労働を余儀なくされた彼らの姿から事後的に発見された特徴として見るべきであろう。

中野重治が身体能力に結びついた朝鮮人像を採用したのは、そこから彼等の〈堅い〉階級的信念を見せようとした意図が働いたのかも知れない。これは少なくとも、彼らの身体性と階級主義という意識が切り離すことのできないものであることを意味する。しかし、決して見逃してはならないのは、身体性と結びついた主人公の表象は在日土木労働者を連想させることによって、結果としてテクストの受容行為の中では朝鮮人に対する人種的偏見の再生産に加担してしまうということである。ここから見えることといえば、階級主義がむしろ人種的偏見をもたらす逆説に他ならないということでもある。

「モスクワ指して」の本文引用は『中野重治全集第一巻』（筑摩書房、一九七六）によるものである。

(1) 尹学準「中野重治の自己批判―朝鮮への姿勢について」『新日本文学』一九七九年一二月号

(2) 林浩治「浅かった朝鮮認識―民族より階級だった」（舘野晳編『韓国・朝鮮と向き合った36人の日本人』明石出版、二〇〇二）

(3) 「内務省警報局報告書」（西成田豊『在日朝鮮人の「世界」と「帝国」国家』東京大学出版会、一九九七から再引用）

(4) その他に、言語学においては、金沢庄三郎などが朝鮮の言語を日本語と同一系統に属しているという主張を行った。

(5) 小熊英二『単一民族神話の起源―〈日本人〉の自画像の系譜』新曜社、一九九五

(6) 「全協」の朝鮮人組合員数の変化推移を見ると、一九三二年の四七一六名だったのが三三年には五五一〇名に増加したが、三四年には五三〇名に激減し、三五年には二六二名まで減少した。

(7) 杉本文雄『満州とはどんな処か』大阪屋号書店、昭和五年二月

(8) 杉本文雄、前掲書

(9) このような境界意識は、湯浅克衛のいわば植民地文学からもみることができる。南富鎮は『近代文学の〈朝鮮〉体験』（勉誠出版、二〇〇

一）の中で次のように書いている。「満州開拓を扱ってりうこの二作（『遥なる地平』と『二つなき太陽のともに』）は、最初から植民者としての自己認識があり、それが満州と中国人への一定の配慮にもつながっている。それが朝鮮を描くときには全くないのである。朝鮮と満州においてこのような認識の相違は、湯浅克衛個人の視点というより、それぞれの植民の背景が大きく影響しているかのように思われる。満州は日本の支配下に置かれてはいるが、表面的には日本とは違う国家と民族の構造がある、どうしても現地への配慮と日本人植民者としての自己認識が要求されたのであろう。しかし、朝鮮の場合になると、日本の延長線にあるひとつの特殊地域の、異郷に過ぎないという認識がある。」

(10) 川村湊「植民地鉄道の夜―旧植民地の日本文学」『知の植民地　越境する』東京大学出版会、二〇〇一

(11) 塚瀬進『満州の日本人』吉川弘文館、二〇〇四

(12) 吉見俊也「帝都東京とモダニティの文化政治」（小森陽一他編『岩波講座6近代日本の文化史　拡大するモダニティ』岩波書店、二〇〇二）

（ソ　ドンジュ　筑波大学大学院博士課程
人文社会科学研究科　総合文学）